



令和7年11月9日(日)「あいぽーと徳島 同和問題講演会」を開催しました。

# このまちが好きだから ～被差別の歴史をもつ地域に生まれて～

『人権学習は幸せの学習』人権学習は幸せに生きるために考え方と行動のしかたを教えてくれます。自分が自分として幸せに生きるために、人が人として幸せに生きるために、誰もが人として幸せに生きるために必要な学び、それが人権学習です。

人権学習を受ける前、私は「自分は差別をしない」と思っていました。それは、私は差別される側の人間だから、差別するはずがないと思っていた。でも、47歳の時にはじめて部落問題の人権学習を受けて、その考えは間違いだと気づきました。人権学習をするきっかけは、中学校PTA役員の時に、卒業生が高校で同級生から部落差別を受ける事件があったことです。その話を聞いた15歳の中学生が言ったのが「僕らがどんなに頑張ってもあかん。どうせ(社会は)認めてくれへん。」でした。この言葉は自分の人生を捨てる言葉です。なぜ、たった15歳の子がこの言葉を言わなければならなかつたのか。誰もが生まれた時には差別の考えは持っていない。差別発言をした子もそうです。問題を起こした子だけを責めるのではなく、その差別の言葉はどのようにしてその子の中に入ったのか、それを問題だと考える必要があると思います。

この差別事象がきっかけになり、「PTA同和問題学習会」を立ち上げ、これから統合する5校の保護者と一緒に人権を学ぶ場を作りました。学習内容は生徒の授業と同じものを受けました。子どもと保護者が同じ人権学習を受けることにより、部落問題を同じ目線で話せること、子どもが学校で学んだ内容が保護者の考え方でひっくり返されることがなくなり、家庭で理解が進みました。

そして、人権を学んで分かったことは、「知らない・知ろうとしない、教えない・教えようとしない、関わらない・関わろうとしない」、これ、しないと言っていますが、何もしていない訳でなくて、学習しないことによって、間違った情報や差別や偏見を伝え残す行動を起こしているということなのです。

学習することで自分の中にある間違った考え方や行動に気づくことができ、気づくことができたから改善していくべきです。そして改善をくり返すことによって心地よく人と関わることができるようになるのだと思います。

偏見や差別の考えは、誰でも身体の中にはあります。自分の中にどんな情報、どんな考えが入っているか、人権学習をしてよりよく変えていくことが大切だと思います。部落差別の考えは今も社会の中にはあります。知ろうとしないと人を差別し傷つけ、残酷なことをしている自分に気づけません。差別は時として人の命を奪います。人権学習を積み重ねることで、自身の中にある偏見や差別の考えに気づき、差別を繰り返さない、そして、決して人の命を奪うことのない生き方ができるのではないかでしょうか。

人権学習を重ねて、誰もが人として幸せに生きて欲しいと願っています

## あいぽーと施設見学・あいぽーとスタディ

あいぽーと徳島にて、施設見学と人権学習をされました。



▲令和7年10月29日  
阿南市人権教育協議会宝田支部のみなさん

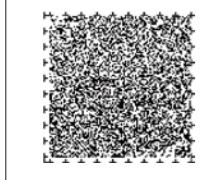


▲令和7年10月30日  
岡山県総社市人権教育推進協議会のみなさん

## 障がい者問題学習

あいぽーと徳島にて、車いす・アイマスク体験をし、障がい者問題についての学習をされました。

。 令和7年9月26日  
橘小学校4年生のみなさん



(音声) 一 下

して100%が補償されるとになり、聞こえない人でも聞こえる人と同じ活躍をするであろうと裁判所が判断したんです。社会環境として理解が進んでいくことに加え、ITが進歩してきたことも大きく影響していますが、この判例は未来への大きなメッセージだと思っています。



僕は「かわいそうな家の子ども」と見られていたからです。僕が生まれて以来、両親は僕の声を「一回も聞いたことがあります。なぜなら、僕が聞こえないからです。でもそれが悲しいかと言われると、それが僕にとっての当たり前なんです。両親の耳が聞こえないから60%しか幸せを感じられないのではあります。持つて生まれたものが僕にとつての100%なんですね。

確かに難しいこともあります。僕が保育園に入った時、他の聞こえる家庭で育つた子ばつかりですから、家庭でほとんどのコミュニケーションを手話でやつてきた僕は、どうやって友だちと喋つたらいいのか戸惑つたことを覚えてます。それでも6歳か7歳くらいになつた時、手話と日本語とう2つの言語を持つ僕には、父や母と他の人をつなぐ通訳の仕事ができるようになります。逆に僕にできないことは両親が進んでやつてくれました。お互いのできること差し出し合つて生きてきたから、うちの家族は幸せに続いてきたんだな、とも思います。

「耳が聞こえない＝不幸」ではないんです。幾通りもの人生があつて、その人の聞こえないことへの捉え方があります。私は聞こえる人として、聞こえな

い人を取り巻く環境の一部として関わっていきたいなという考え方を持っています。手話とは、独立したひとつの中の言語です。よく勘違いされるのですが、動画などの説明に字幕を添えるだけでは、手話を第一言語としている子どもなどへのケアとしては不十分です。他にも会話の抑揚で伝わる重要なポイントなどが、全部同じ大きさ、太さ、色で書いてある文書では伝わりにくかったりします。こういうことは、聞こえる人の立場だけで考えても想像するのは難しいことです。健常者から障がい者への矢印ではなくて、むしろ障がい者から健常者への矢印を作つていただきたいなと思うんです。それを取り組んでいくことによつて「こういうことに困つてるんだ」、「こういうことから対い等意識を持つてない」そういうことが必ず分かると思います。

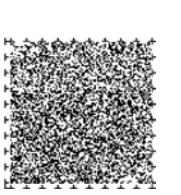
これから時代、どんどん A I やロボットが進歩していく中で、障がい者雇用の仕事は本当に残っていくのか、そんな不安さえよぎります。どうか聞こえない人のできないところだけ見るんじやなくて、できることが見ていただきたいですし、そのためには相手を分かろうとすることが大事で、これは技術よりも、皆さん的心にかかると思います。



講師プロフィール 尾中 友哉(おなかともや)さん NPO法人 Silent Voice 代表理事

1989年滋賀県大津市生まれ。ろう者の両親のもと聞こえる子ども(コーダ)として育ち、母語である手話を身につけ、徳島の祖母に日本語を教わった。

聴覚障害のある子どもたちが自分らしく生きる社会を目指し、教育と就労の両面から支援を行う。主な事業に「デファアカデミー」「サークルオー」「デビズ」がある。2018年日本青年会議所主催 人間力大賞 内閣総理大臣奨励賞、2019年日本財団主催 ソーシャルイノベーションアワード最優秀賞受賞。



(音声コード)